



Title	『留学生のための長崎生活ガイド』と付属会話教材の作成
Author(s)	永井, 智香子
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.7, p.35-44; 1999
Issue Date	1999-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5559
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-22T10:03:45Z

『留学生のための長崎生活ガイド』 と付属会話教材の作成

永 井 智香子

1. はじめに

留学生は長崎に来たその日から生活をしていくためにさまざまな情報が必要となる。たとえば、郵便局や銀行はどこにあって、どういうシステムなのか、交通システムはどうなっているのかなど。しかし、渡日後日も浅く言葉にも慣れない留学生たちにとって、情報を集めるのは簡単なことではない。そんなとき、欲しい情報が整理された形で載っている“生活の手引き”のようなものがあれば非常に役に立つと思われる。そこで、留学生センターでは『留学生のための長崎生活ガイド（英語版と中国語版）』（以下『生活ガイド』と呼ぶ）を作成し、1999年4月から配布している。

しかし、ただ単に手引きを見て情報を得るだけでは不十分である。その情報を得たあとにはそれを実行するためのサバイバル的な日本語が必要になる。我々は情報を与えるだけでなく、日本語の面でもサポートしようと考え、『生活ガイド』にリンクした付属会話教材『きょうから話そうー長崎の生活日本語ー（試用版）』も作成した。

本稿では『生活ガイド』とその付属会話教材を作成した経緯とその内容、作成の際の留意点、さらに作成後の効果などについて簡単に報告したい。

2. 作成までの経緯

本学にはいわゆる指導部門がないので専任教員全員が生活指導と日本語教育を兼任している。そのような環境の中、『生活ガイド』とその付属会話教材は留学生とのさまざまな日々のやりとりの中から生まれた。本学には『留学生のための生活案内』という1992年に作成された“生活の手引き”があるが、その内容も一部古くなり、また、付け加える必要のある内容も多くでてきた。センターが省令施設として設置されてから3年、センターで開講されている日本語コースも省令施設となってからこの春で6期目を迎えている。以下『生活ガイ

ド]作成に至る過程をざっと振り返ってみる。

省令化された施設となったのは1996年5月のことで、その年の10月より、従来からの補講に併せて、国費留学生のための日本語予備教育（以下「研修コース」と呼ぶ）が始まった。第1期（1996年10月～1997年3月）は初めての研修コースということでコースを動かすことに試行錯誤を重ねているうちに終わったという印象である。生活にかかわる一般的な情報を求める学生にはその都度対応したが、まだ、獲得した情報を蓄積していく余裕はなかった。

第2期（1997年4月～1997年9月）も1期目同様、研修コースの学生を中心として生活情報を求める学生があとをたたなかった。2期目に入ると少し余裕も出てきて、質問に答えるたびに、入国在留、健康、交通、通信、公共施設などに関する情報がすこしづつ蓄積されていった。情報は蓄積されてはあったが、まだ整理された状態にはほど遠く学生が質問にくるたびにファイルから必要な資料を取り出すのに手間取ったり、コピーしたり、問い合わせたり、地図を見せたりと、対応がスムーズにはいかなかった。もちろん蓄積された情報もまだ十分とは言えず、新たに調べることも多かった。地図や写真が豊富な“生活の手引き”の必要性を強く感じ始めたのもこの時期である。

第2期の夏休みに小さな事件が起こった。ある研修コースの学生が家族の呼び寄せに必要な書類「在留資格認定証明書」を書留にせず送ってしまい、それが紛失してしまったのである。詳しくきいてみるとその学生は郵便局で英語で「書留」と言ったがうまく通じなかったということがわかった。郵便局側も手を尽くしてくれたが、結局記録が残っていなかったので手紙は出てこなかった。「書留」という言葉さえ教えておけばと悔やまれた。情報を与えるだけでは不十分で、その情報に付随した日本語も与える必要があることを痛感したのである。このことが直接のきっかけとなり、3期目から研修コースで“サバイバル日本語”を教えるクラスを開講することにした。

第3期（1997年10月～1998年3月）になるとそれまでの経験から留学生は主にどのような生活情報を求めてくるかということがわかってきた。そして、新しい“生活の手引き”の必要性はいよいよ高まってきた。また、この期から始めた週一回の“サバイバル日本語”クラスのシラバスはそれまでに留学生たちが求め、センターの教職員が収集した生活情報の蓄積に基づいて作っていた。

【生活ガイド】とそれにリンクした付属会話教材を教育改善推進費（学長

裁量経費)で作成することが具体的に決まったのは第4期(1998年4月～1998年9月)であった。『生活ガイド』と付属会話教材をリンクさせれば、必要な情報を得ると同時にその情報に関連した“サバイバル日本語”も同時に学習できると考えたのである。それまで蓄積してきた情報と“サバイバル日本語”クラスをつなぐ形となった。98年9月より『生活ガイド』の作成にとりかかり、作成と情報の収集整理を同時進行で行っていった。

第5期(1998年10月～1999年3月)も4期目同様『生活ガイド』の作成と情報収集を同時進行で行った。98年12月より付属会話教材の作成にもとりかかった。その基礎となったものはそれまで行ってきた“サバイバル日本語”クラスで配ったプリントであった。

3. 『生活ガイド』について

3-1 『生活ガイド』の体裁と内容

大きさはA4版で英語版が112ページ、中国語版が108ページである。中国語版が英語版に比べて4ページ少ないのは中国語版には英語の地図を添付しなかったからである。開くと、左側のページが日本語(ルビつき)、右側のページが同じ内容の英語または中国語というように、見開きで日本語と外国語が対応する形式をとった。全部で19章からなる。主な項目と巻末に添付したのは次のとおりである。

主な項目

- ・学内施設関係

保健管理センター、学内図書館、学内スポーツ施設、学内生協、留学生センター等

- ・学内組織関係

留学生課、長崎大学外国人留学生後援会等

- ・入国在留関係

外国人登録、一時出国と再入国、在留期間更新、家族の呼びよせ、資格外活動、在留資格等

- ・学外施設関係

公営スポーツ施設

- ・地域紹介関係

長崎紹介、アミューズメントスポット

・住居関係

国際交流会館、民間アパート、市営県営アパート、火災共済等

・交通通信関係

JR、バス、路面電車の有効利用、主なバスターミナル、飛行機の切符、郵便局の利用等

・病院・健康関係

国民健康保健、医療費補助、市の保健センター、大学周辺の病院案内等

・留学生支援団体関係

日本語教育ボランティアグループ一覧、国際交流ボランティア組織紹介等

・金融関係

地方銀行と都市銀行、口座開設、国内送金と外国送金、ATM、郵便局の口座、郵便局からの送金

・メンタルヘルス関係

生活相談、チューター制度等

・危機管理関係

非常のときのアクセス法等

・家族関係

赤ちゃんが生まれたとき、保育園、公民館紹介等

・インターネット関係

外国人向け生活情報ホームページ、他大学の留学生センターのホームページ等

巻末に添付したもの

- ・大学（文教キャンパス）周辺地図
- ・平和公園、坂本地区周辺地図
- ・長崎市街地図
- ・国際交流会館への道しるべ
- ・学内地図（文教キャンパス）
- ・九州と長崎の地図
- ・路面電車の路線図と電話番号一覧

日本語の文章はできるだけ簡潔にし、フォントや文字の大きさを変えたり、下線をひいたり、表にしたり、枠で囲んだりして、読みやすくなるように配慮した。また、各項目に学生にとって役に立つであろうと思われる具体的なデータ、写真、イラストを入れた。地図との連結についても「場所は106ページの地図参照⑥」というように具体的に示した（丸数字は地図の中に示された番号）。

3-2 『生活ガイド』作成上の留意点

『生活ガイド』は留学生が直面するであろう問題にすみやかに対応できることを常に念頭におきながら作成した。具体的には次ような点に留意した。

1) それまでに留学生が求めた生活情報の蓄積を最大限に生かす

過去の経験から彼らがどのような情報を必要としているかがつかめる。それらの蓄積を最大限『生活ガイド』に盛り込むことに当然のことながら留意した。今回『生活ガイド』に入れた項目の中で学生がその情報を求める頻度が高かったのは次のようなものである。

- ・日本語教育ボランティアグループ一覧
- ・市営、県営アパートの申し込み法
- ・家族の呼び寄せについて
- ・市の保健センターについて
- ・市民プールなど公営スポーツ施設について
- ・国際交流団体の紹介
- ・銀行や郵便局を使つての送金法
- ・学内生協の詳しい説明
- ・大学近くの主なバスターミナル

2) 地図、写真、イラストを多用し、手早く視覚的に情報が得られるようにする

地図は前述のように6種類入れた。留学生は大学内の場所から長崎内、九州内、日本国内のさまざまな場所をきいてくる。その度に種類の異なる地図を探さなければならず、対応に手間取った。その経験から必要であると思われる地図をすべて入れたわけである。写真やイラストも“百聞は一見に如かず”で、日本語に慣れない留学生のための『生活の手引き』には多すぎることはないと考えた。少々細かいことになるが、見開きで左右が

同じ内容であっても可能な限り異なる写真やイラスト（同じ写真やイラストの場合もサイズや配置が異なる）を使用した。そうすることで、読む者の注意をさらにひくであろうし、視覚的に新たな情報を盛り込むこともできると考えた。

3) 求める情報に速くたどりつけるようにする

留学生が『生活ガイド』を手にしてから求める情報にたどりつくまでに時間がかかってしまうようでは困る。できるだけ速く情報が得られるように、まず、目次にできるだけ詳しく内容を紹介した。さらに「…については～ページ参照」のようにできるだけ関連事項を連結させるようにした。

4) 見開きで日本語と外国語を対応させ、日本語の語句の修得にも役立つようにする

見開きで日本語と外国語を対応させ、さらにルビをつけることにより、外国語に相当する日本語の語句がわかるようにした。こうすることにより留学生は生活に必要な語句を増やすことができるであろうと考えた。

4. 付属会話教材について

4-1 付属会話教材の体裁と内容

大きさはA4版で100ページ。手引きとは異なり、まず日本語があり、その下に同じ内容を示す英語があるというように二つの言語を混在させた。試用版なので英語と日本語のもの一種類とした。内容は以下の12章と巻末の2項目からなる。

目次

1章 アパートを探す

不動産屋の広告の見方、不動産屋で

2章 切符を買う

時刻表の見方、割引切符を買う

3章 病気・けが

受付で、診察室で、薬局で

4章 銀行で

口座を開く、送金をする、両替をする、ATMの画面

5章 郵便局で

郵便を出す、速達や書留など普通郵便以外の形で郵便を出す

6章 電話をかける

家庭に電話をかける、大学に電話をかける

7章 きょうから買い物

売場をきく、ほしいものをもとめる、レジでの言葉、市場や個人商店での買い物

8章 場所を聞く

目的地への行き方をきく、バスでの行き方をきく、電車の中でおりるところをきく

9章 タクシーに乗る

場所がはっきりわかるとき、住所しかわからないとき、行き方を説明するとき

10章 サバイバル漢字・サバイバル用語

緊急時に必要な漢字・用語、生活漢字・用語、駅の漢字・用語、病院の漢字・用語、銀行や郵便局の漢字・用語、買い物の漢字・用語、その他

11章 あいさつ

一日の中でのあいさつ、指導教官の研究室をたずねる、季節のあいさつ、その他のあいさつ

12章 長崎のことば・ことわざ

長崎の言葉、長崎の言葉のしくみ、ことわざ

巻末に添付した項目

会話表現ノート

長崎の一年

1章から6章までが『生活ガイド』にリンクしている。リンクしているものについては『生活ガイド』の目次にその旨を示した。各章はいくつかの項目からなり、それぞれの項目は、基本的には、数行の短い「モデル会話」と、それに付随した「単語リスト」、「会話表現ノート」（巻末の「会話表現ノート」のどこにあるかページのみを示したもの）、「練習」という構成になっている。

【生活ガイド】同様、フォントや文字の大きさを変えたり、下線をひいたり、枠で囲むことにより、読みやすくなるように配慮した。また、各項目には学生にとって役に立つであろうと思われる銀行や郵便局などの書類の縮小コピー、写真、イラストを多く入れた。

巻末に添付した「会話表現ノート」とは、フィラーや間をとるときの表現など、コミュニケーションストラテジー的なものを取り出して説明を加えたものである。また、巻末の「長崎の一年」では祝日について簡単な説明をするとともに、節分や七夕などのような祝日ではない日本的な行事なども紹介した。さらに、精霊流し、長崎くんち（祭り）、などの長崎ならではの行事についても説明した。

4-2 会話付属教材作成上の留意点

留学生がより速くサバイバル的な日本語を身につけることができるように以下のことを留意して作成した。

1) これまで実際に学生が教師に求めてきた“サバイバル日本語”は必ず盛り込む

これまで、「医者に病気の症状を説明したいがどう日本語でいったらいいかわからない」「できるだけ安い切符を買うにはどう言えばいいか」「日本の不動産のシステムもわからないし、安くていいアパートを探すにはどう言えばいいか」といった質問を学生からしばしば受けた。それらは必須の項目として盛り込んだ。

2) 写真、イラストをできるだけ多く使用する

“サバイバル日本語”のクラスで写真やイラストがないので苦労したことが何度もある。たとえば、簡易水洗、ロフトなどがなかなか説明できなかったのである。写真一枚、イラスト一枚あれば瞬時に説明できるであろうという思いをしばしばした。そこで、留学生の協力を得てできるだけたくさんモデル会話の場面を示す写真を撮影し、組み込んだ。こうすれば、モデル会話を練習する際に場面をイメージでき、より効果的であると考えたのである。また、「サバイバル漢字・サバイバル用語」の項目では実際にその漢字や用語が使われている現場の写真を掲載するようにした。

3) できるだけ地域色をだす

モデル会話の中に長崎の地名や駅の名前を豊富に入れた。また、そのモデル会話の舞台も学内生協など実際に身近にある場所を使うようにした。さらに、長崎のことも入れた。常に“長崎の生活日本語”であるということに留意した。

4) 文法の未習既習にこだわらない

あくまでも“サバイバル”優先、つまり、得た情報を利用するためサバイバル的な日本語を身につけることを優先させ、未習の文法であっても必要なものはとり入れた。

5) 練習問題を多くする

“サバイバル”優先であるから渡日後間もない学生にとってかなり難しい会話もある。そこを、豊富な練習で補おうと考えた。

6) コラムを活用する

『生活ガイド』に載せるには少し詳細すぎるが日常生活を営む上で知っておくと役に立つと思われる内容はコラムにして説明した。たとえば、「簡易水洗」「路面電車の乗り方」「バスの乗り方」「“エンリケと申しますが”と“エンリケですが”の違い」などがある。

7) 実物を示す

さまざまな申込書やアパートの一覧表のようなりストはできるだけ実物を示し、実際に記入したり見たりしながら練習できるようにした。

8) 実際の場面で使われている会話をモデル会話として使う

各項目のモデル会話を作成する際、大学付近のスーパーや銀行や郵便局に行き、実際の場面で使われる会話を採取した。

9) “サバイバル漢字・用語”を入れるようにする

学生が日常生活において頻繁に目にし、それがわからないと生活に支障をきたしたり、危険な目にあったりする可能性のある漢字もできるだけ取

り入れるようにした。たとえば、ATMの画面やバスや路面電車の表示、道路標識などである。

5. おわりに

『生活ガイド』の配布を始めたのは1999年4月からで、日も浅いが、生活情報を求める留学生への対応が非常にスムーズに行えるようになった。これまではいちいち資料を探したり、コピーしたりと対応にかなり時間がかかっていたのが短時間で行えるようになった。専任教官の生活指導に使う時間が減り、多忙を極める事務職員の仕事も軽減されたと思う。そればかりではなく、手続き面にうとい専任教官が『生活ガイド』を頼りに留学生を市役所へ連れて行って外国人登録や健康保険の手続きを手伝ったというように日本人にも役に立つことがわかった。そこで、5月に行ったチューターオリエンテーションでは全チューターに『生活ガイド』を配布した。もちろん、研修コースの学生のための生活ガイダンスにも使い、きわめて有効であった。

ただ、情報化時代の現在、できるだけ最新の情報を組み込んだとはいえ、生活ガイドは作成したそのときから時間がたつにつれて部分的に内容がどんどん古いものとなっていく。今後変更部分を挟み込んだり、改訂版にむけて常に情報収集を行ったりといった努力が必要である。

付属会話教材のほうは99年4月より試験的に“サバイバル日本語”を教えるクラスで使用している。これから先授業を進めながら、こうした教材のあり方を検討し、次のステップへつなげて行きたいと考えている。

『生活ガイド』もその付属会話教材もまだまだ不完全なものであるが、今回の“試作品”が今後の発展の基礎になると確信している。

(留学生センター講師)